



# 「ポコの森」

---

ここは遙か遠く遠く海を越えた国、『シャルル』。

ここには昔から国を守っていると言いつたえられている森、『ポコの森』がありました。

ポコの森はとても緑が豊かで、そこには様々な動物たちが住んでいました。

ポコの森ではいつも小鳥たちの楽しい会話が絶えません。蝶が舞い、草木は囁き合います。木の上ではリスがピョンピョンと飛び跳ね、木の下ではウサギの兄弟が楽しく遊んでいます。その横をシカの親子が通り過ぎて行くのでした。そう、ポコの森は動物たちにとってまさに安らぎの場所でした。

ポコの森のまん中には大きな大きな木があります。

その木はもう何百年も生きており、その木のことを動物たちはとても大好きでした。

その大きな木は動物たちに『ジョルおじいさん』と呼ばれています。

この大きな木、ジョルおじいさんは何でも知っていました。分からないことがあると動物たちは、いつもジョルおじいさんに聞きに行くのでした。

ポコの森の東側には大きな川が流れていて、頑丈な橋が架けられています。

その橋を渡ると大きな町があり、大きなお城が建っていました。お城には王様が住んでいて、名前は『キャロット国王』と言いました。そのお城に同じく住んでいるのが『シャルル王子』。シャルル王子は幼い頃にお母さんを病気で亡くしています。シャルル王子は15歳、それまでずっと寂しい思いをしてきましたが、とても勇気があってとても優しい王子様に育っていました。

ポコの森の西側には川は流れていませんでしたが東側と同じ様に大きな町があり、大きなお城が建っていました。このお城にも王様が住んでいて、名前は『パンプキン国王』と言いました。この西側のお城には『マロン姫』という名前のお姫様が住んでいます。このマロン姫はお城から出て町へと出かけると、町の人たちと一緒に畑仕事や牛のお世話をするのでした。町の人たちみんながマロン姫のことを大好きだったことは、言うまでもありません。

しかしこの東側と西側のお城にそれぞれ住むキャロット国王とパンプキン国王は、子供の頃はとても仲の良い友達同士でしたが、些細なことから喧嘩をし、それ以来ずっと今まで遊ぶことも無く話をすることも無く過ごしてきました。シャルルという一つの国の中に二人の国王がいたのです。

この物語の主人公は小さな妖精『ルル』。

ルルの身長は丁度みんなの小指の長さと同じくらいです。

ルルは虹色に輝く綺麗な羽で、ポコの森をピューと飛び回るのでした。

ルルは今年ポコの森の妖精学校に入学したばかり。ルルは何にでも好奇心が旺盛で冒険が大好きです。だけどその冒険のおかげで時々怖い思いをすることもあったのでした。しかしそれでもルルは、自分の知らない新しい世界を見ることが大好きでした。

ある日の朝のこと。

ルルは妖精学校へと急いで向かっていました。

「もう～、お母さんに早く起こしてって頼んでおいたのに～。これじゃあ、遅刻しちゃうよ。」

ルルはこの日の朝、寝坊をしてしまったのです。

「おはようルル。随分急いでいるね～」

リスの『キャッピー』が木の枝の上からルルに話しかけました。キャッピーはルルの大親友です。

「おはようキャッピー。ごめんよ学校に遅刻しそうなんだ。」

ルルはそう言うと、そのまま急いでキャッピーの目の前を通り過ぎて行きました。

ルルが学校に着くともう授業が始まっていました。

「ポコの森は1000年前からあり、その頃、森と人間と動物たちは仲良く暮らしていました。私たち妖精一族はその光景を見ていることがとても大好きでした。しかしいつからか森と人間と動物たちは、それぞれが自分たちのことばかりを考えるようになり、争うようになってしまったのです。ポコの森には昔から伝説の森の妖精がいると言い伝えられています。その『森の妖精ポコ』が全ての者たちのことを争いから救い、助けてくれると信じられているのです。」

と、ローズ先生はそこで話を中断しました。

「ルル、何時だと思っているのですか？もう授業は始まっていますよ。」

「ごめんなさい、ローズ先生。寝坊してしまいました。」

ルルがそう言うと友達みんなが笑い出しました。

ローズ先生が再び話します。

「しー、みんな静かに。ルル、寝坊してしまったことは仕方が無いかもしれませんが、でも、みんなと行動するときにはある一定のルールがあるものです。これはルルが大人になっても同じことなのですよ。よろしい。今日は寝坊したことは許すとしましょう。先生は何よりもルルが正直に話して、そうして謝ってくれたことが嬉しいのです。さあ席に着いて。授業の続きを行います。」

先生はそう言うともうそれ以上は何も言わず、再び授業を再開しました。

学校が終わった帰り道、ルルはジョルおじいさんの所へと寄っていくことにしました。

「ジョルおじいさん、こんにちは。」

「こんにちはルル。よくきたね。」

ジョルおじいさんはいつでもルルのことを優しく迎えてくれます。

「やあ、ルル。今日はローズ先生に怒られちゃったかな？」

ジョルおじいさんの太い枝の影から、リスのキャッピーも顔を出しました。

「キャッピーも来ていたんだね。いやーローズ先生にはチクリと怒られちゃったよ。」

それを聞いたジョルおじいさんもキャッピーも笑い出しました。ジョルおじいさんが話します。

「そうか、でもそうやって一つ一つ学んでいくものなんだよ。失敗は失敗かもしれないけれど、それは恥ずかしいことではないんだよ。その後の事が大切なんだ。次からはどうしたら良いかな？」

「次からは目覚し時計をセットして自分でちゃんと起きようと思うよ。もう2度と遅刻しないようにね。・・・ところで今日は何の話をしてくれるの？」

「いつものお話だね。そうだな、今日は何の話が良いかな？海の話はこの前したね？」

「う～～ん。」

「よし、そうだ。今日はわしがまだ若かった頃に出会った小鳥の話をしてよう。」

「聞かせて。」

ルルは目を輝かせました。

「この小鳥の名前はね、ホープと言ったんだ。ホープはとても体が小さくてね。でも飛ぶことにとても一生懸命で、まっすぐな強い心を持った子だった。ホープが生まれたのはわしが117歳の時だった。ちょうど今キャッピーがいる所で生まれたんだ。」

「ここで!？」

キャッピーが驚いて言いました。

「そうここでホープのお父さんとお母さんは巣を作ったんだ。そうしてホープは4兄弟の一番最後に生まれた。わしは元気な4兄弟が成長していくのを見るのが好きだった。みんな仲良しだったよ。ところがホープたちがちょうど飛ぶ練習を始めようとしていた頃、巣が襲われたんだ。」

「誰に襲われたの？」

ルルとキャッピーの声が重なり、二人は思わずお互いを見ました。ジョルおじいさんは少しニコリとして一呼吸おき、また続きを話し出しました。

「あれは嵐の日の夕方じゃ。大きな1羽のフクロウが突然、ホープ家族めがけて頭上から襲ってきたんだ。ホープのお父さんは必死に子供たちのことを守ろうとして戦った。でもフクロウの方が力が強かったんだ。お父さんはフクロウに体当たりしたんだが逆に弾き飛ばされてしまって、木に衝突してそうして死んでしまったんだ。お母さんはというと巢の上で羽を精一杯広げて子供たちを守っていた。だが、お母さんもフクロウの爪に引っ掛けられて地面へ叩き付けられてしまったんだ。その時、一番年上のお兄さんもお母さんを助けようとして、一緒に地面へと落ちてしまった。あっという間の出来事だったよ。フクロウは飛び去って行って、結局3兄弟だけ残ったんだ。わしは、何も助けてやる事ができなかった・・・。」

「・・・。」

ルルもキャッピーもその光景を想像すると少し恐くなりました。ルルが口を開きます。

「それで・・・それでその後3兄弟はどうなったの？」

「かわいそうなことに3番目に生まれたホープのお兄さんも、嵐の雨に打たれたせいなのか、数日後に病気になって死んでしまったんだ。それでも2番目に生まれたお兄さんとホープはしっかり飛べるまでに成長したんだよ。そのお兄さんの名前はウィッシュと言ったな。」

「ホープとウィッシュかあ。」

「そう、そのホープとウィッシュはやがて巣立って行った。ホープは西へ、ウィッシュは東へと行くことにして、お互い1年後にまたここで会おうということになったんだ。そうして1年が経った。ホープはここへ戻ってきたんだよ。体は小さかったが羽ばたきは力強く、その目には勇気が満ち溢れていた。数日遅れてしまったがお兄さんのウィッシュもここへ戻ってきたんだ。わしは本当にうれしかったあ。そんなやり取りが5年間続いた。6年目、ウィッシュは家族ときたんだ。ウィッシュはその時これが最後になるかもしれないと言った。ホープは初め寂しそうにしていたが大きく笑って、それは良かったと言ったんだ。それぞれ違う場所で苦労してきたんだろなあ。ホープとウィッシュは言葉は必要ないほどの絆で結ばれておった。わしがウィッシュのことを最後に見たのはその日となった。」

「ホープはどうなったの？その後はもうここへは来なかったの？」

キャッピーが身を乗り出して言いました。

「ホープはね、7年目もここへ来たよ。そうしてここで巣を作って家族を作ったんだ。ホープ兄弟と同じ様に4兄弟をお母さんと育て、4兄弟は立派に巣立って行った。残ったホープとお母さんは半年ほどここで楽しく暮らしていたんだが、お母さんは命を全うして、ホープが見守る中死んでしまったんだよ。ホープは1週間ほど泣いていたんだが、1週間後に昔、フクロウが襲ってきた時のような嵐が訪れて泣くことをやめた。ホープは嵐の空をしばらく眺めていたがやがて何かを決心し、嵐へ向かって高く高く舞い上がって行ったんだ。ホープの羽は嵐の中蒼く蒼く輝いておった。それはとっても美しく力強く、綺麗だったよ。ホープは一途に生きたんだ。それがわしが見たホープの最後となった。」

「蒼い鳥。そうか、そのホープがああ蒼い鳥・・・。」

とルルが言いかけた瞬間地響きがとどろき、ジョルおじいさんの前を馬にまたがった12人の騎士達が勢いよく駆け抜けて行きました。

「あの騎士達は・・・また、戦争が始まってしまう・・・。」

ジョルおじいさんが言いました。

「戦争？何の戦争？」

「・・・。」

ジョルおじいさんは黙ったままです。

「少し見てくる！」

ルルは騎士達を追って飛んでいきました。キャッピーもルルと一緒に駆け出しました。

ルルとキャッピーが騎士達のことを追っていくと、騎士達はポコの森の東側に位置する大きな川の橋の前で止まっています。東側のお城にはキャロット国王とシャルル王子が住んでいます。どうやら騎士達は西側のパンプキン国王とマロン姫の使いのようです。1人の騎士が東町の2人の門番に向かって何か言っています。ルルとキャッピーは木の陰に隠れて話を聞いていました。

「我々はパンプキン国王の護衛騎士団。私の名はジュピター・シャーロット・ワインゲルト・ビンセントフォックス。今日はパンプキン国王の手紙を持ってきた。そこを通して頂きたい。」

2人の門番も堂々と答えます。

「ここを通すわけにはいかない。手紙なら私が預かる。キャロット国王には必ず届けるぞ。」

ジュピターがそれに答えます。

「そうはいかんだ。これは必ずキャロット国王に直接手渡すようにとのパンプキン国王からの命令だ。どうしても言うならば無理にでも通るぞ。そちらも争いたくはあるまい。」

「くうう！」

12人の騎士達と2人の門番は今にも戦いだしそうです。そこへ偶然にもシャルル王子が町の方からやってきました。乗馬の稽古の為、ポコの森へ向かおうとして来たのでした。2人の騎士も一緒です。

「どうしたのです？あの者たちは誰ですか？」

シャルル王子が落ち着いた口調で門番に尋ねました。

「彼らはパンプキン国王の護衛騎士団、隊長の名前はジュピター・シャーロット・ワインゲルト・ビンセントフォックスです。パンプキン国王の手紙を直接キャロット国王に渡したいとのこと。」

「そうですか、わかりました……。」

シャルル王子はしばらく考えていました。シャルル王子はまだ15歳でしたが、とても思慮深いのでした。

「……よし、通しなさい。私が彼らを先導します。」

シャルル王子はジュピターについて来るように言いました。こうして12人の騎士達はキャロット国王のお城へと向かって行きました。その様子をルルとキャッピーは最後まで見ていました。

その日の夜。

ルルは眠る事ができませんでした。何かとんでもないことが起こってしまうような気がしたのです。同じ頃、キャッピーもルルと同じように寝付けずにいました。キャッピーもまた理由のない不安な気持ちにさらされていたのです。

その頃かわってキャロット国王は、イスに座りパンプキン国王からの手紙を何度も読み返していました。そこへシャルル王子がドアを開けてやって来ました。

「まだ起きていらしたのですね。パンプキン国王からの手紙には何と書いてありましたか？」

「パンプキン国王め……。パンプキン国王からの手紙には町を放棄して城をあげ渡せと書いてある。もし断るなら戦争も辞さないとのことだ。」

「それはまた随分と強引な要求ですね。なぜですか？」

「1つの国の中に2人の国王はいらないということだ。パンプキン国王は1ヵ所に力を集めて国を強くしたいらしい。」

「なるほど、そういう事ですか。手紙の内容に従うわけにはいきませんがしかし、民のため戦争だけは避けなければなりません。何か良い方法はないでしょうか？」

「我々のほうが騎士の数は上だが……。」

キャロット国王は黙ってしまいました。色々決めかねている様子です。シャルル王子が耐えかねて話します。

「……民はもちろんのこと、我々の騎士団も傷付けるわけにはいきません。それにできればパンプキン国王の騎士団も傷付けたくはない。パンプキン国王はいつまでに返事をしろと？」

「1週間後と書いてある……。」

「1週間ですか！？」

その晩、結局キャロット国王もシャルル王子も良い解決方法を思いつきませんでした。2人とも、とうとうこの日がきてしまったかと心の中では思っていました。シャルル王子はこの時既に戦争の覚悟も決めていたのでした。

1週間はあっという間に過ぎてしまいました。西のパンプキン国王は朝から落ち着かない様子で部屋の中を行ったり来たりしています。東のキャロット国王からは、何の返事も来ていませんでした。そばのイスにはマロン姫が座っています。

「お父様、そんなにイライラしては心臓の病気に良くありません。」

パンプキン国王はハッと、にっこりとマロン姫に笑いかけました。

「おおそだな、ありがとうマロン姫。しかし・・・私も戦争は避けなかったがどうやら仕方ないようだ・・・。」

「戦争！？。このままではダメなのですかお父様？」

マロン姫はパンプキン国王の顔を覗き見るように言いました。

「マロン姫の知っての通り、この国には2人の国王がおる。わしとキャロット国王だ。しかもこの国は『シャルル』という名前が付けられている。そうだ、東のシャルル王子の名前からとったものだ。キャロット国王は子供の頃からいつもこういうやり方をするのだ。わしはそれが許せない・・・。1つの国に2人の国王はいらんのだ。」

「私には分かりません。ポコの森を挟んで西と東で平和に暮らしているではないですか。どうしてですか？」

「分かっておくれマロン姫、時は来たのだ。もう戦争は避けられん・・・。」

マロン姫の頭の中に、町の人々の笑顔が浮かんできました。きっと町の人々は、今日もいつもと変わらぬ生活を送っていることでしょう。町の人々を思う気持ちはパンプキン国王も同じことでした。

「お父様・・・。」

パンプキン国王はマロン姫の呼びかけを無視して、窓の側まで歩いていき町を見下ろしました。

パンプキン国王が話します。

「なあマロン姫よ、良い国王とは何だろな、本当の平和とは・・・。」

そうして深いため息をつき苦しい顔をしたかと思うとキリッと目を開き、1人の兵士を呼びました。

「ジュピターに護衛騎士団を集めるように言いなさい、時が来たと・・・。」

こうしてこの日、東のキャロット国王と西のパンプキン国王の戦争が始まったのです。

この日ルルはいつも通り妖精学校へと向かっていました。

今日は少しだけ早起きしてジョルおじいさんの所へと寄っていくことにしていました。

「おはようルル。」

「おはよう、ジョルおじいさん」

「どうしたんだい？元気が無いね。この前のことを気にしているのかな？」

「何か、嫌な予感がするんだ。何かとんでもない事が起こるような・・・。」

「実はね、わしも同じ様に不安なんだ・・・。この国にはね、昔からポコの森を挟んで西と東に町があって、何十年かに1度大きな戦争を繰り返してきたんだ。それがまた起こってしまうような気がしている・・・。戦争は破壊行為以外の何ものでもない。ルル、戦争の原因とは一体何なんだろう？」

「原因？それはお互いの仲が悪いからじゃないかな。」

「でも初めはそうでは無かったはずだよ。」

「お互いが嫌いなんだよ。」

「そうだねルルの言う通りだ。でももっと言えば『不安な気持ち』が原因なんだよ。友達と喧嘩をしてしまう時とはどういう時だろう？それはねお互いが信じられなくなって、不安な気持ちが心の中に湧いてきた時なんだ。この不安な気持ちが憎しみを生み、争いを生むんだ。私達は本当はもっとお互いを知るべきなんだ。恐がる事なんか無い。気持ちをもっと伝えていくべきなんだよ。だからねルル、不安になってはダメだよ。きっと戦争は始まってしまう。我々に止めることはできない。しかしいづれ終わりも来ることだろう。その時ルルがどんなに苦しくともこのことを忘れなければ、きっとまたやり直せる。」

「・・・分かった。もう学校へ行くね。」

「ははは、ちょっと難しかったかな。今日も不安や不機嫌になったりせず、いつも通り過ごすんだよ。」

「うん。」

そう言うとルルはまた妖精学校へと向かっていきました。

ジョルおじいさんは飛び去っていくルルの後ろ姿を見ながら、ルルが少し大きくなったように感じました。

そうしてルルが学校へと着き、1時間目の授業中のことです。

「良いですか？我々妖精は決して人間に姿を見られてはならないのですよ。これは我々の身を守り、同時に自然を守ることにもなるのです。もし人間に見られてしまったならば、その者は他の森へと行かなければなりません。我々妖精は

自然に所属しており、自然を守るために存在するのです。」

ローズ先生の声の間にかすかに太鼓の音が聞こえてきました。

それが徐々に近づいてくるのが分かります。

ローズ先生は授業を中断し窓の方へ歩いていきました。生徒達も窓の方へと集まります。誰一人として一言も話さないのです。やがて太鼓の音はますます大きくなり、教室の窓ガラスが振動しました。ルルが窓から下の方を覗くとこの前見たジュピターを先頭に、パンプキン国王の騎士団が列を成して通り過ぎていくのです。何百人も兵士がいるようです。

「一体どうなってしまうんだろう？」

「何が始まるの？お祭りかな？」

「そんなことないでしょ。」

「わははは！」

友達はざわめきだし、笑っていました。

それとは対照的にルルは黙ったまま、恐くなって少し震えていました。

いよいよ戦争だ、戦争がどんなものか知らないけれど……。ルルはそう思っていました。

騎士団はジョルおじいさんの前も通り過ぎていきました。

ジョルおじいさんの戦争が始まるという嫌な予感が当たってしまったのです。

ジョルおじいさんはポコの森が戦場になりはしないかと、とても心配になりました。

やがてパンプキン国王の騎士団は、東町の橋の前まで来ました。

騎士団は進行を止めジュピターが2人の門番に話します。

「1週間が経った、最後通告をする。キャロット国王の返事は何か？」

ジュピターは大きな声で言いました。

「……。」

2人の門番は黙ったままです。

「城はあけ渡せないということだな？それがキャロット国王の返事か？」

「……。」

「よし分かった……。」

ジュピターはそう言うと騎士団の後ろの方へと行き、ジュピターに代わって大砲が10門前へ出てきました。

「これよりパンプキン国王の命令により攻撃を開始する。いくぞ……。撃て！！」

ジュピターの命令でいっせいに大砲が撃たれました。

大砲の弾は東町に降り注ぎ、家々が破壊されます。

暫くして砂煙が治まると、また町に静けさが訪れました。

町の人々が見当たりません。そう、キャロット国王は既に町の人々を避難させているのです。

すると突然、町の周囲に張り巡らされている城壁の上に、キャロット国王の兵士達が姿を現し、いっせいに弓を放ちました。パンプキン国王の騎士団はこれを防ぐため、盾を持った兵士達が前方に出てきました。いよいよ本格的に戦闘が始まったのです。

妖精学校ではローズ先生は授業を取りやめ、生徒達は早く学校から帰ることになりました。

生徒達はローズ先生に決して東町の方には近付かないようにと厳しく言われていましたが、ルルは行ってみることにしました。ポコの森にもドン、ドンと大砲の音が引切り無しに聞こえています。

ルルが東町の方へ向かって飛んでいくと、途中、キャッピーが木の上でルルのことを待っていました。

キャッピーがルルに話しかけます。

「ルル、やっぱり見に行くの？」

「うん、この目で見てみたいんだ。」

「だけど危ないよ。もしかしたら死んでしまうかもしれないよ。」

「分かっているけど、でも自分の目で見なければいけない気がするんだ。大丈夫、危険を感じたら逃げるから。」  
キャッピーがルルの顔を見ると、ルルは少しも笑っておらず真剣な顔をしていました。

「ルル、じゃあ僕も一緒に行くよ。」

「キャッピー危ないよ。僕は飛べるからいざとなったらどこへでも逃げることができるけど、キャッピーはできないから・・・。」

「親友を1人にできないよ。それに親友を1人にするのかい、ルル？」

キャッピーは優しい笑顔を浮かべていました。ルルもそれに答えるように、少し笑顔を浮かべました。  
こうしてルルとキャッピーは一緒に東町の方へと向かっていきました。

東町に着くと戦闘は激化していました。

東町の門は既に閉ざされています。

ジュピター達、西の騎士団は苦戦しているようでした。川が流れているためお城に攻め込むには門を通るしかありません。  
ルルとキャッピーはこの前初めてジュピターを見た時の木の影に隠れ、その様子を見ていました。

ジュピターが先頭に立ち、馬で駆け抜けながら兵士達に指示を与えているのが聞こえてきます。

「弾込めが終わり次第、各々の判断で撃て！ひるむな！我々の力を東の兵士達に見せてやれ！」

ドン、ドン、ドンと、引切り無しに城壁や町に向け大砲が撃たれます。しかし城壁は頑丈にできており、なかなか崩れないのでした。

やがて夕日が沈み夜が訪れ、戦闘は一時中断されました。

「いっそのこと、突撃しましょう。」

兵士の内の1人がジュピターに話しています。

「ならん、上からの攻撃で死傷者が多数出てしまう。」

「我々はパンプキン国王の勝利のため、あらゆる犠牲は覚悟の上です。」

「気持ちはありがたいが、私としてはそれは命令はできない。」

ジュピターは兵士達のことを思い、何とかして別の方法を考えようとしていました。

一方、ルルとキャッピーも話をしていました。

「お腹すいたね。」

キャッピーが言いました。

「そんな事ないよ・・・。」

とルルが答えた瞬間、ルルのお腹がグウ〜と鳴りました。ルルもキャッピーも少し驚いてしまいました。

「し〜、ジュピターに聞こえちゃうよ。」

キャッピーが笑いをこらえながら言いました。

「ごめん、ごめん。」

ルルも笑いをこらえながら答えました。

「はい、ルル。少しだけど。」

と言ってキャッピーが、ふわふわの尻尾の中から2枚のビスケットを取り出しました。

「ありがとう。」

ルルはこれを持ちキャッピーと一緒に食べました。食べ終わるとルルが、

「お母さん心配しているだろうな・・・。」

と言いました。キャッピーも同じようにお母さんのことを考えました。しかし話し合いの結果、この日はここで寝ようということになりました。ジュピター達とは対照的に、ルルとキャッピーはこの後どうなるのかなど、心配してはいないの  
でした。



次の日の朝。

ルルは頬つぺたに落ちる雨粒で目が覚めました。

その日は雨です。ルルとキャッピーは近くにあった葉っぱをもぎ取り、それを傘にして一緒に入りました。

この日はまだ戦闘は始まっていませんでした。

東町の城壁の上に、鎧を身に着けたシャルル王子が姿を現します。

「ジュピターよ、東の王子シャルルだ。君達に勝利は無い、直ちに引き返せ。君達は十分戦った。」

シャルル王子は大きな声でジュピターに話しかけました。ジュピターが前に出てきます。

「お言葉には感謝します、シャルル王子。しかし我々は決して引きません。そちらこそ降伏し、城をあげ渡してもらいたい。」

「ジュピターよ、兵の数では我々の方が上だ。私は君とは争いたくない！素直に引き下がれ！」

「それはできない！」

徐々に2人とも口調が強くなってきました。

しかし共通していることは2人共争いたくないということでした。

空は徐々に雲行きが怪しくなり、やがて雷が急にキャロット国王のお城に落ちました。

それに驚いたジュピターの兵士の1人が、誤って大砲を撃ってしまいました。

これを合図に大砲がいっせいに撃たれ、シャルル王子の兵士達もいっせいに弓を放ちました。

ジュピターは撃つのを止めるよう指示を出しましたが、兵士達は大砲の音が大きすぎてそれが聞こえません。

ジュピターはやむ無く攻撃を開始しました。

その日も一進一退が続き、夜が来ると再び戦闘は中断されました。

ルルとキャッピーは雨水で喉を潤し、この日もキャッピーが持ってきたビスケットと一緒に食べました。

ジュピターは兵士達に何か話しています。

「これではいつまで経っても城へ入れない。仕方ない、明日、城門を突破する。みな覚悟は良いな。」

「我々はどこまでも付いていきます。」

「うむ。」

ジュピターは小声だったためルルとキャッピーにはよく聞こえませんでした。どうやら明日、突撃することを決心したようでした。

3日目、昨日とは変わって激しい雨は止みましたが、引き続き薄暗い低い雲が広がっていました。

ルルとキャッピーは朝ごはんの代わりに最後のビスケットを食べ、食べ物はこれで無くなり、今日は夜になったら家へ1度帰ろうということになりました。

その頃ジュピターは1箇所で大砲を集めるように兵士達に指示を出していました。

狙いは門です。それに気が付いたシャルル王子はそうはさせまいと、兵士達に攻撃の指示を出しました。

しかし大砲を、盾を持った兵士達がしっかりと守っています。やがて大砲は門の前に集められました。

「良いか、私の合図でいっせいに撃て！狙いは門だ！準備は良いか！」

ジュピターが指示を出します。順に大砲のそばにいる兵士達が準備良しの合図を返しました。

「よし、撃て！！」

ジュピターの指示に従い前方にいた盾を持った兵士達が左右に分かれ、大砲が一斉に発射されました。大砲の弾はそれぞれ門に正確に当たり、左右に分かれていた盾を持った兵士達は素早く元に戻りました。再びジュピターが指示を出します。

「弾込め！・・・よし、撃て！！」

2発目の大砲の弾が発射されました。門は今にも破られそうです。そうして3発目、遂に門は破られました。

「進め！！」

ジュピターの号令で兵士達は一斉に突撃します。城壁の上にいるシャルル王子は門の正面まで降りてきました。2人の兵士が一緒です。

「まだ引き付けろ！！」

シャルル王子が言いました。2人の兵士は今か今かとシャルル王子の指示を待っています。  
額に汗がびっしょりです。ジュピターの兵士達は既に橋の中間を通り過ぎていました。

「よし、今だ！！」

次の瞬間、シャルル王子の指示で橋が爆破されました。

橋が川へと落ちます。ジュピターの兵士達は驚き混乱し引き返しました。

更に城壁の上から火のついた矢が放たれます。ポコの森はアッと言う間に炎に包まれてしまいました。

「一時退却！引け！引け！」

ジュピターが大声で指示を出しています。

「あちちちっ！」

炎はルルとキャッピーが隠れていた場所にも瞬く間に広がり、キャッピーのふあふあの尻尾に火がついてしまいました。  
それに慌てたキャッピーは前の方へ出てしまいました。

「そっちへ行っちゃダメだよ！キャッピー！」

ルルが必死にキャッピーの事を呼び止めましたが、キャッピーはそれどころではありません。

キャッピーは尻尾の火を手で叩き、ようやく消す事ができました。

「熱かったー。」

次の瞬間です。

キャッピーは退却してきた騎士達の馬にボンと弾き飛ばされてしまいました。

キャッピーが宙に舞い地面に落ちます。

ルルは驚きの余り、一瞬動けなくなってしまいました。

ハッとしてルルは我に返りキャッピーの側まで急いで行きました。

「キャッピー！キャッピー！」

「ルル、逃げて・・・」

キャッピーは微かに答えました。意識が朦朧としています。

「キャッピーを置いていけないよ！」

ルルはキャッピーを炎が届かない所まで、何とかして引っ張って行きました。

「キャッピー！しっかりして！」

ルルは再びキャッピーに話しかけましたが、キャッピーは答えません。

ルルはどうする事もできず、途方に暮れてしまいました。

「そうだ、ジョルおじいさんの所へ行こう・・・。」

こうしてルルは、ジョルおじいさんの所へと急いで飛んで行きました。

「ジョルおじいさん！」

「おう、ルル無事だったか！ポコの森が大変な事になってしまった！」

炎はジョルおじいさんの所にも迫りつつありました。

「ジョルおじいさん、もうどうしようもできないよ・・・。キャッピーは馬に弾き飛ばされて・・・。」

ルルの目から涙が落ちました。

「ルル、まだ希望を捨てちゃいけないよ。まだ何か方法があるはずだ。何か・・・。」

ジョルおじいさんの場所に、風に乗った大量の煙が流れてきました。炎はすぐそこまで来ています。

「・・・そうだ。僕が直接パンプキン国王に会って話してくる。この戦争を止めてくる・・・。」

「ルル、妖精一族は人間に見られてしまったら、もうこのポコの森には戻ってこれないのだよ。」

「それでも構わない、それしか方法がないから。必ずこの戦争を止める・・・。」

「ルル！ルル！」

ルルはジョルおじいさんの制止を振り切って、西のパンプキン国王のお城へと向かって飛んで行きました。

ルルがパンプキン国王のお城に着きます。

ルルはお城の一番上の窓が開いている事に気が付き、そこから中へと入りました。お城の中へ入るとパンプキン国王とマロン姫がいました。パンプキン国王はイスに深く座り、暗い表情をしています。

「あなたは誰！？」

マロン姫がルルに気が付きました。ルルが答えます。

「僕は森の妖精ルルです。パンプキン国王にお願いがあって来ました。」

その声に驚いたパンプキン国王は振り返り、ルルの事を見て更に驚きました。

「まさか、本当に妖精がいるとは！」

パンプキン国王は非常に驚いている様子です。ルルはパンプキン国王に向かって話しました。

「パンプキン国王どうかお願いします、この戦争を止めて下さい。ポコの森が死んでしまいます。パンプキン国王しかこの戦争を止められないんです。」

パンプキン国王はルルから急に話しかけられ、少し困惑していました。少し興奮している様子です。

「な、何を急に、始めた戦争をやめるわけにはいかんのだ。わしはキャロット国王に勝ち、この国をもっと良くしてみせる！それが町の人々の為だ！」

ルルが反論します。

「戦争は何も生み出しません。東の町の人々の家は破壊されてしまい、ポコの森はやかれてしまいました。」

「これは戦争だ！仕方ない事なのだ・・・！」

パンプキン国王は興奮してそう話しかけたかと思うと立ち上がりましたが、心臓を押さえ苦しい表情をし、そのまま倒れてしまいました。パンプキン国王はもともと心臓に病気を抱えているのでした。

「パンプキン国王！」

「お父様！誰か！誰か！お医者さんを！」

マロン姫の大きな声ですぐに兵士が駆けつけお医者さんと呼ばれに行きました。マロン姫はパンプキン国王のすぐ側まで行き、パンプキン国王の事を抱き上げました。パンプキン国王がマロン姫に向かって話します。

「無念だ、すまないマロン姫・・・わしは限界のようだ・・・わしはいつもお前の幸せを願っていたのだが・・・マロン姫・・・すまない、すまない・・・。」

「お父様しっかりして！お父様！」

パンプキン国王はルルの方を見て、またマロン姫の事を見ました。

「わしは本当はこの戦争が怖いんだ・・・恐かったのだ・・・」

パンプキン国王はそう言うと静かに息を引き取りました。

マロン姫はこの戦争をパンプキン国王に代わって自分で止める決心をしました。

そうして涙をこらえ急いで手紙を書き、それをお医者さんと呼ばれに行き戻ってきた兵士に渡しました。

「これをジュピターに届けて下さい、急いで。」

こうしてマロン姫が書いた手紙は、ジュピターの元へと急いで届けられました。

手紙にはパンプキン国王が死んでしまった事、よって戦争はもう続けられない事が書かれていました。

ジュピターは初め信じられない様子でしたが、パンプキン国王の死が伝えられ降伏する決心をしたのでした。

曇りだった空は徐々に晴れてきています・・・。

3日間の戦争は終わりました。

戦争が終わって一週間後、西のマロン姫と東のキャロット国王の間に平和条約が結ばれました。

今回の戦争でポコの森はかなりの部分が焼けてしまいましたが、ジョルおじいさんは無事でした。

ルルは戦争の間、パンプキン国王とマロン姫に会ってしまい、妖精一族の人間には決して見られてはいけないという約束を破ってしまいましたが、今回は特別に許され、ポコの森からは出て行かなくても良いという事になりました。

ルルはキャッピーの家に来ています。キャッピーの事をお見舞いに来たのでした。

「キャッピー体の調子はどう？」

「ルル、来てくれたんだね。大分良くなったよ。」

キャッピーはそう言うとポーズをとって、腕に力こぶを作りました。

「良かった、あの時はキャッピーが本当に死んじゃったかと思ったよ。」

「いやー僕もそう思ったよ。でもお母さんに聞いたんだけど、僕の事を青い鳥が家まで連れてきてくれたんだって。」

「青い鳥って、もしかして……。」

「うん、もしかするとホープだったのかもしれないね。まあ昔ジョルおじいさんが会ったホープが今でも生きているとは思えないけどね。」

ホープという青い鳥の事は、前にジョルおじいさんから聞いた事がありました。

「ところでルル、ジョルおじいさんの話聞いた？」

「ジョルおじいさんの話って？」

「すごく心配なんだけど、この前の戦争で東町の川の橋が壊されちゃったでしょ。そこで作り直すらしいんだけど……それがジョルおじいさんを切り倒して作るらしいんだよ……。」

「えっ!？」

ルルは頭が真っ白になってしまいました。

ルルはこの時初めてこの話を聞いたのです。

ルルはキャッピーに別れを言って、急いでジョルおじいさんの所へと向かいました。

「ジョルおじいさん！」

「おうルル、元気かい？」

ジョルおじいさんはいつもと変わらない様子です。

「ジョルおじいさん、キャッピーから聞いたんだけど、ジョルおじいさんが切り倒されちゃうって本当なの!？」

「ああ……、本当だよ。この前、東の兵士がここへ来てそんな話をしていたよ。」

「どうして？ジョルおじいさんは本当にそれで良いの!？」

「ルル、これが運命なんだ……、仕方ない事なんだよ。」

ジョルおじいさんは既に運命を受け入れているようでした。

「そんな……。」

ルルの目から一粒の涙が落ちました。

それを見たジョルおじいさんがルルに優しく話しかけます。

「ルル、これが最後になるかもしれないからしっかりと聞いておくれ。わしが若い頃から東と西の町は戦争を繰り返してきたんだ。その度にポコの森は焼かれてきた。わしの仲間も大勢死んだ。しかし、わしだけがいつも生き残ってきたんだ。その意味が今ようやく分かってきている。きっと、わしは西と東の架け橋になる為に生かされてきたんじゃないよ。」

「でもジョルおじいさんじゃなくても良いじゃないか!？」

ルルがジョルおじいさんをお願いするように言いました。

「結局は同じ事なんだ、ルル。誰かがやらなければいけない。そうしてこれはわしにしかできない事なんだよ。わしはこれを成し遂げる事が最後の願いなんだ。なあルル、ルルが大人になると、一生懸命努力しても人とはどうしても埋まらない差というものがある事に気が付くと思う。しかしそれはそれで良いんだ。自分にしかできない事が必ずある。それを一生懸命やることだよ。良いねルル、これがジョルおじいさんからの最後のメッセージだ。答えは自分の中にある、それをどうか見つけて欲しい……。わしはもう十分生きた。」

ジョルおじいさんはそう言うと空を見上げました。

「何でだよ！ジョルおじいさん、ジョルおじいさん！」

ルルの目から涙が止めど無くこぼれ落ちました。

そうするとポコの森も悲しむようにポポポポ、ココココ、コポコポポ、ポポポポとざわめきだしました。

ルルは思い切り泣きました。

涙が枯れるまで泣きました。

涙が枯れてもまだ泣きました。

やがて泣き疲れたルルはジョルおじいさんの所で静かに眠りに落ちてしまいました・・・。

・・・ルルが気が付くと、ルルは家の前で寝ていました。

目を少し開いた時、青い鳥が飛び去って行ったように感じました。

大分時間が経っているようです。

ハッとしてルルはジョルおじいさんの事を思い出し、急いで東町の方へと向かって飛んでいきました。

ルルが東町へ到着すると、大きな丸太が運ばれていました。

ジョルおじいさんは切り倒されてしまったのです。

もうジョルおじいさんとは楽しい会話ができないかと思うと、ルルは悲しくなりました。

しかしよく見ると西と東の兵士が一緒になって運んでいます。

その中にはシャルル王子とジュピターの姿もありました。

お互いが協力し合い助け合って、一生懸命丸太を運んでいるのでした・・・。

それから3日後、遂に橋は完成しました。

橋の上を西と東の町の人々が行きかいます。橋の上から子供達は釣りをしています。

橋は平和の象徴となったのです。

マロン姫が町の方から出てきました。シャルル王子も一緒です。

「私は東で、マロン姫は西の町で共に人々の為、生きましよう。もう一度やり直して、この国を本当に良いものにした  
たい。」

「きっと亡くなったお父様も、そう望んでいると思います。」

「パンプキン国王の事は残念でした・・・。マロン姫、何か困った事がありましたらいつでも連絡を下さいね。すぐに駆け  
付けますから。」

「どうもありがとう。」

こうしてマロン姫は西の町へと帰って行きました。それを見ていたルルは一粒の涙が自然に流れましたが、次の瞬間に  
は笑っていました。ジョルおじいさんの笑顔が見えたような気がしたのです。

ポコの森には昔から伝説の森の妖精がいると言い伝えられています。

その森の妖精ポコが、人々を争いから救い出し助けてくれると信じられているのです。

ジョルおじいさんの切り株の上に、1羽の青い鳥が降り立ちました。よく見ると、その青い鳥の足元には小さな芽が出て  
いました・・・。